“資本家”と“企業者”

馬　場　宏　二

前稿[1]での予告を実行すべく書き始めた。途中で予想外の支障が生じたので，脱稿に幾分時間がかかったが，構想は出発時のままである。

表題の引用符で判るように，これは語原論・語義史である。無制約に「資本家と企業家」とすると経営学上の根本問題になるし，マルクス経済学なら両者を区別するか否か，区別するとすれば貸付資本と機能資本の概念如何，ひいては監督労働の価値形成の有無といった価値論の根本概念にまで関わってくるから，これまた大問題になる。そうした概念論はひとまず背後に置いて，常識化され過ぎたこの二つの用語の由来を，経済学の歴史の範囲で辿り直してみようというのである。常識のなかに案外な錯覚が含まれていることが判るはずである。

1. チャンドラーの粗忽

アルフレッド・チャンドラーは著名な経営史家だが，日本で特に有名なようである。現に2002年の経営史学会年次大会で，共通論題がアメリカ的経営モデルの有効性に関するものだという触れ込みなので出席してみたら，おそらく学会の花形であろう3人の報告者が，いずれもチャンドラーとの個人的付き合いぶりから話を始め，あとはチャンドラー理論に対するそれぞれ勝手な解釈を振り回すことで終わった。アメリカ的経営とは，どうやらチャンドラー「理論」のことらしかった。

チャンドラーが精力的な実証史家で，しかも史実の図式化に長けていて，魅力的な成果を挙げ続けたことまでは誰でも承認するだろう。ただ，あれだけ隙だらけの議論を，日本の学界が，あたかも『資本論』かバイブルかと言わんばかりの引照基準にしていることには，いささか驚かされた。大きい論点についての批判は既に二度ほど述べたことがある[2]が，補えばまだいくつか出てくる。経営史学会の諸氏は，ああした弱点を承知の上で彼を崇拝しているのだろうか。

だがこの稿は，改めて大問題を取りあげようというのではない。誰でも気付くであろう，さしあたり揚げ足取りレヴェルのチャンドラー批判から始める。

『経営戦略と組織』[3]という，初期の出世作がある。大学院学生の希望があったので，昨年度のテキストにした。私としては年をとってから初めて読むので新鮮な感じもしたし，少なからぬ欠陥や無理な図式化がかなり苦になったが，今回はそこは不問にする。問題は第6章の終わりご

ろにある，「20世紀中期の経済のなかでは，巨大会社の本社幹部は，18世紀後半のアダム・スミスのいう資本家や，19世紀初期のジャン・バチスト・セーのいう企業家と同じように，決定的で，しかもそれと判別できる人物なのである」[4]という一文の用語である。因にスミスの資本家はcapitalist, セイの企業者はentrepreneurであり，この邦訳文の「それと判別できる」はむしろ，資本家，企業家，大企業幹部の三者が「同様なものと認定できる」と解しておいた方がわかり易いが，いずれにせよチャンドラーの用語の不正確は看過出来ない。

ここは彼が大見栄を切っているところなのだが，お気の毒ながらスミスは「資本家」という語は使っていない。セイは「資本家」とともに「企業者」を使っているが，「企業者」の初出というならカンティヨンが先にあり，しかもセイの企業者が静態的な綜合者であるのに対して，カンティヨンの企業者は今日風に言えばリスク・テイカーであるから，より企業者的である。チャンドラーの幹部が一番近いのはシュムペーターの企業者（Unternehmer）である。いずれにせよセイで片づけるのは不適切である。すなわちチャンドラーの用語は，甘く言っても一つは誤り一つが不適切，厳しく言えば二つとも誤りなのである。

これを些細なアラ探しと感じる人が結構いるかも知れない。しかし，チャンドラーの次なる出世作『経営者の時代』[5]の原題は，他ならぬVisible Handである。「大企業の幹部」の歴史的一般化に他ならないが，これがスミスの「見えざる手」invisible hand[6]の向こうを張った命名であることは言うまでもない。対抗相手が使っていない「資本家」を，あたかも使っていたように気安く述べるのは，いささかお粗末ではないか。この程度の資料探索だとしたら，壮大な図式を造り出すための個々の史実検出は信用できるのか。これは一見したほど些細な論点ではない。

1ーa.『国富論』と“資本家”

ことは英語世界の中である。チャンドラーにとって「資本家」をスミスが使ったか否かを詮索することは，我々がそうするより，はるかにた易かったはずである。われわれにしたところで，エドウィン・キャナンによる『国富論』編集の後ではずっとた易くなっている。現に私自身，チャンドラーの用語がおかしいと気づいたのはキャナン版『国富論』の邦訳，岩波文庫版『諸国民の富』[7]を読んでいたからであり，それが誤りであることを確認できたのは，英語のキャナン版『国富論』とその邦訳『諸国民の富』に付せられた索引のおかげである。

『国富論』に「資本家」という用語はない。それらしいことを言う時には，スミスは，製造業者，商人，農業者と業種別に分けて表現しており，賃金論の箇所で一般的に労資関係を言う場合には，「親方」と「職人」[8]と，いわば身分的な用語で現している。

スミスも，信用論と関わって資本家，企業者，となるべき概念を捕えかけてはいる。しかし，いずれも適切に用語化出来ず[9]，明確な概念になっていない。察するに当時の英語にいずれに当たる語彙もなかったせいであって，その点は後に挙げるセイやミルの指摘にある通りであろう。

「資本家」の方は『国富論』よりやや後，おそらくフランスから入って来た。「企業者」は経済学用語としては，結局19世紀末以降フランス語のentrepreneurがそのままの形で使われることに

なり，20世紀に入って一般化するとともに entrepreneurship 企業家精神まで造語されるに到る（OED）。

OEDによれば，英語のcapitalistの初出はアーサー・ヤングの『フランス紀行』（1792年）である。『国富論』出版より16年後のことだから，『国富論』に「資本家」が有る訳がない。これを確認した上で同辞典の用例をもう少し見る。

1792年，ヤング

A gross evil of these direct impost is, that of moneyd men, or capitalists escaping all taxation.…ここでは資本家は金持ちと同義である。

1832年，コールリッジ

The poor rates are the consideration paid by capitalists for having labour at demand. …資本家が雇用主の意味になっている。

1845年，ディスレーリ

The capitalist flourishes, he masses immense wealth : we sink lower:than beast of burthen. …資本家とは貧乏人を貧しくしながら，自らは蓄積して豊かになるもの。資本蓄積と同義とされている。

1845年，J．S．ミル

This is true of capitalist farmers, but not of labourer farmers. …階級対立のもとで捉えられている。

因にOEDによる語の説明は，capitalistは「資本を蓄積したもの，金融業，製造業の企業に用い得る資本を持つもの」である。なおCODには，enterprise, entrepreneur があるにも拘らず，独立語としての capitalist は出て来ない。

英語の capitalist がフランスから入って，英語として今日の「資本家」の意味になって行ったことはほぼ明らかであろうが，フランス由来らしいことの傍証をもう一つ，次項で挙げておく。

1—b. “資本主義”と“資本家”

重田澄夫氏は，マルクス特に『資本論』が，「資本家的生産」とは言っていても「資本主義」の語を使っていないと気付いたところから出発して“資本主義”の語原を都合三冊の本[10]を書くほどに探索した。それはそれで敬服すべき労作である。だが，いささか不思議なのは，“資本家”の語原探索が，全く試みられなかったことである。氏の問題意識からしても当然試みらるべきであったし，それを離れても有益な探索だったはずである。

とは言え，ああした丹念な探索は，意図外の成果を齎すものである。実際，氏は，「資本主義」の方の探索の一環として，ジャン・デュボア著『フランスにおける政治的社会的用語集』を引用しているが，その中で「資本家」なる語が大革命以前から使われていたことを，問わず語りに示したのである[11]。

OEDによるヤングと重田氏によるデュボアを重ねると，「資本家」の語原は，どうやらcapitalisteとして18世紀半ばのフランスにあったらしいという見当は付いてくる。ところがそれを語誌的に確定するのは，私程度の能力では不可能である。というのは，フランス語の語原辞典

は数点あるが，そこからcapitalisteにせよentrepreneurにせよ語原を確定することが極めて困難な書き方になっていて，専門のフランス語学者ででもなければ，必要な知識を導き出せないからである。実際，フランス語学者達も，フランス語の語原辞典はOEDほどの信頼性はないと言っていると聞く。

その傍証になるかも知れないが，一番手っ取り早い*Trésor de la langue française*で“entrepreneur”の語原を探ったら，J. B. Say1832とあった。これはセイの死亡年が混入したか，さもなければ，後に取りあげる『経済学』*traité d'economy politique*の第6版の意味であろうが，実はセイの同書は，初版が1803年に出ており，そこにすでに“capitaliste”も“entrepreneur”も含んでいた。このことは大東文化大学図書館がこの初版の復刻本[12]を持っていたので，私にも簡単に見出せた。ここから，ア・ベ・セがやっと程度の私の方がフランス知識人よりフランス語を良く知っているという笑い話を作れることにもなる。

そこで取り敢えず語誌について大辞典を頼ることをやめるとすると，経済学書で追って見るしかなくなるが，あいにくフランス経済学史をろくに知らない。偶然知り得た範囲で述べておくと，上述のように19世紀初頭にはセイが「資本家」と「企業者」をいわば組概念として用いていた（チャンドラーも折角セイを引き合いに出すのなら,「企業者」についてももう少しマシなことが言えたはずだが，多分スミスの「資本家」の場合と同様，原文に全く当たらずに，孫引きか昔からの記憶だけで書いたのだろう)。そのセイの効用についてはやや後に触れるとして，セイ以前となると，18世紀前半のカンティヨンが「企業者」を定義しかつ多用していることには注目されるが，こちらは「資本家」を全く使っていない。「資本」とは書いても，供給者を「資本家」とは述べないのである。この語はまだなかったか，あるいはもとがアイルランド人のカンティヨンのフランス語が完全でなかったか。しかしそこへ入り込んでしまうと話が茫漠となる。ひとまずこれで,「資本家」の語源は18世紀半ばのフランスにあったようだ，と見当を付けただけにして置く。

2. シュムペーターの苦労

これまで日本では,「企業者」の語はシュムペーター『資本主義発展の理論』[13]に由来すると解されてきたようである。きちんとアンケートを取ったわけではないが，日常接する経営史家や若手研究者は大抵の場合そう思っている。何よりも『経営学大辞典』[14]にそう書いてある。そうなら原語はUnternehmerだし，事実そちらを使う人もいる。だが米語流行りでドイツ語不振の今日，そちらはますます減って，米語経由のentrepreneurを，アントレプレナーなどと奇妙な片仮名語にして使う場合が結構多くなっている。経営学者の感性が，こうした捻じれを殆ど気にしないほど粗雑になったためらしい。

シュムペーターは「企業者」の創案者ではない。しかしそれをUnternehmerと表現するには，かなりの苦心があったと見て良い。ひとまず同書第二章「経済発展の根本現象」を見よう。

彼は経済発展を単なる経済成長（bloß Wachstum der Wirtschaft）と区別する。「成長」は人口や

富の単なる量的増大のことであって，質的変化を含む「発展」とは区別されると言うのである[15]。その質的変化は［新結合］によって起こる。新結合として，新財貨の生産，新生産方法，新販路の開拓，原料・半製品の新供給源獲得，新組織の実現の五つが挙げられていることは，この道では常識であろう。

さて，その新結合を引き起こす主体が企業・企業者である。資金供給者としての銀行が別途考察されるが，新結合の主体は企業者であり，彼こそが静態的循環経済を動態的発展経済に転ずる動力源である。こうした把握の上にシュムペーターは企業者の心理的社会学的考察を積み重ねている。

この際の銀行信用と企業者の関係が，セイにおける「資本家」と「企業者」の関係に対応していることは見やすい。(因にここの「新結合」は後の『景気循環論』で「革新」と言い換えられ，さらに『資本主義・社会主義・民主主義』での「創造的破壊」に連なって行く[16])。

これはこれで，かなりすっきりした叙述である。苦労したようには見えない。しかしそれは，シュムペーター体系について解説書[16]の知見を借りるとともに，「企業者」や「新結合」の説明については邦訳[17]に拠っているからである。同書の初版は1912年刊だが，邦訳も英訳本も，底本は1926年刊の第二版である。この版には「第二版序文」が付いており，初版第七章を省略したこととともに，「第二章はそれ以下のすべての部分が生まれてくる基本構造を与えるものであるが，それは殆ど全文にわたってまったく新しく書き直された」と明示している。書き直されたからすっきりしたのである。

ひとまず，大東文化大学図書館所蔵の初版と第二版とを粗っぽく比較して見た。そもそも初版の叙述は全体が錯綜しており，「企業者」と「新結合」の，新たな鍵鑰概念を打ち出すのに苦労している模様が明らかに見て取れる。

初版には，「経済成長」の文字は第二版同様早目に出てくる。だが肝腎の「新結合」は章の後半が幾分進んだところでようやく出て来，しかも第二版のように五つに括られてはいない。「企業者」はもっと後の，ほぼ章の七割が済んだ辺りでようやく登場するが，一旦出てくると，後は毎ページのように現れ，手を変え品を変えて説明を繰り返している。われわれ自身の体験から類推すれば，これは創案したばかりの新概念がまだ脳中に定着し切っていない時の叙述であり，いわば自己確認の過程である。それが，両語とも第二版になるとずっと早目に登場してくる。概念が明確化したのである。第二版ではなお，註や小見出しといった形式上の整理も行なわれていて，全体がそうとうすっきりしている。おそらくシュムペーター自身にとって，肝腎の第二章を整理するために，再版が必要だったのであろう。

初版でもうひとつ注意すべきは，セイの名前がないことである。これはむしろ，迷っていたのを再版で付け加えた，といった趣がある。邦訳を見ると企業者を論じた中程に「われわれが簡単に承認することのできるいくつかの定義がある。その中にはセイにまでさかのぼる著名なものがある。すなわち，企業者の機能は生産要素を結合し，総合することである，というのがそれである」[18]とある。そして，結合が繰り返しでなく最初の結合なら自分の定義に合致すると付け加え

ている。セイの名を取り巻く文章の大意は初版とそう変わっているわけではない[19]。シュムペーターが初版時にセイを失念していたなどとは考え難い。ただセイの企業者の概念は，ここで紹介されているように極めて形式的なもので，普通には静態的概念と解される。初版ではおそらくシュムペーターは，動態論である自分の概念に照らしてセイを敢えて無視したのである。しかし再版ともなると語源論も無視し切れなくなる。初版と第二版の間に『経済学史』[20] を書いているから，学説史的関心は一層強まったであろう。そこで，循環論だけなら別だが，最初の結合は「新結合」なる自分の概念に合う，と譲歩したのである。

こうして，日本で「企業者」の語源と錯覚されているシュムペーター自身，邦訳では語源はセイだと明示していたのである。それに気付かなかった日本の経営学者達もチャンドラー同様粗忽だったと言わざるを得ない。

チャンドラーのvisible handすなわち「大企業の幹部」は，先行諸説のなかでは，このシュムペーターの企業者に一番近い。セイの形式的・静態論的entrepreneurは，チャンドラーの知識の範囲では「企業者」の語原なのだろうが，内容上のズレが大き過ぎる。今のところ初出となし得るカンティヨンのentrepreneurは，今日風に言えばリスク・テイカーであり，その面では共通するが，個人稼得者の性格が強いから，組織内人間の面が出て来難い。両面併せ持つ点で，チャンドラーの「大企業の幹部」はシュムペーターのUnternehmerに重なる。否，それはむしろ，シュムペーターの「新結合」の五番目の担当者，新組織の実現者自身に他ならない。

チャンドラーはなぜシュムペーターに明示的に言及しなかったのだろうか。学生時代にはハーヴァードで教わったのかも知れない相手である。無論私には判り様もないが，実は『経営戦略と組織』の中で，名前を一度は挙げている[21]。シュムペーターが，革新と適応的対応を区別したと言っているのだから，結構肝腎なところを使ってはいるのだが，これは企業者概念そのものではなく，挙げている文献も『経済発展の理論』ならぬ1947年の雑誌論文である。チャンドラーの先学挙証はここまで来ても今一つ落ち着きが悪い。

さて，シュムペーターは先行者として，ともかくもJ. B. セイを挙げていた。こちらを取りあげよう。

3. セイの効用

J. B. セイは，フランスにおけるアダム・スミス説の普及者として著名だが，経済理論家として高い評価を受けている人物ではない。リストはアダム・スミスを水で薄めた説と罵り，マルクスは『資本論』中でバカと言う罵言を数回は浴びせている。シュムペーターでさえ，遺稿となった『経済分析の歴史』の中で浅薄だと極め付けている。時の政府と思想的に対立したとか，経済学を法則の科学として捉えたとか，高く評価した書[22] もあるが，セイはおそらく理論的独創性のない人だったであろう。叙述は極めて形式的で面白味はない。セイの販路法則なぞと時々言われるが，これはケインズ一流のこじつけ[23] らしく，独創的なものでも，特に有難いものでもな

い。

ところが，こうしたセイでも，“資本家”と“企業者”の語原探索の際には結構役に立つことを述べているのである。無論彼自身が語原だと言うのではない。その形式主義が，案外なところで役に立つのである。

彼の『経済学』初版[24]で「企業者」は二度扱われる。一つは第一巻第七章「生産のための労働・資本・土地の結合は如何に行なわれるか」の中である。

まず，労働者はその労働を資本を所有するか土地を所有するものに提供し得る…労働の提供者の支払いは給料と呼ばれる。資本の所有者は…資本の提供者の支払いは利子と呼ばれる。土地の所有者は…土地の提供者の支払いは地代と呼ばれる。といったバカバカしい定義が並ぶ。それならそれに続いて，労働・資本・土地を結合して生産を行なうものが「企業者」であるとなりそうなものだが，どういう訳かそこには「企業者」の定義はない。しかし用語としては出てくる。「その業をなすのに土地が要らず，全資本を背に負い，全労働を自分の指で行なう研師は，同時に企業者であり，資本家であり，労働者である。その資本に比してかくも少ない財産しか持たないこんな貧しい企業者も珍しい」[25]。

もう一つが，第二巻第八章「産業企業者の稼得」である。ここでは企業者の得るものが彼の労働に対する給料だとされ，それと彼の資本家としての稼得との関係が縷々論じられる。

概念として詰めようとすると，セイの議論ははっきりしなくなる。研師などはカンティヨンの企業者の例示の中にありそうな例だが，カンティヨンからの継承を明示しているわけでもなく，企業者の稼得が変動所得だとはっきり述べている訳でもない。企業者労働の対価としての給料だというだけなら固定所得になるはずだが，それでいて変動所得説になりそうなことも書いているのである。

当面セイの概念自体はさほど重要ではない。有用なのはむしろ言語学的註である。それは相い関連する初版註と第六版註に示される。

初版第二巻第八章に，注目すべき註が付されている。「『国富論』第一巻第八章のスミスは，産業企業者の稼得と資本の稼得とを区別するのに大いに困惑している。彼は二つを資本の稼得の名のもとに混同し，その深遠なる知恵にも関わらず，それぞれの変動の原因を見分けるのに苦労している。私見によれば両者は原理的に異なる。勤労の稼得は熟練の度合いやその習得に必要な期間の長さ等々で決まる。資本の稼得は資本の潤沢希少の程度や投下先の安全度等々で決まる」[26]。

さらに明瞭に言語学的なのが，第六版第四章「全産業に共通する作用」に付せられた註である。いわく「英語は，産業企業家entrepreneur d'industrieに該当する語を持たない。おそらくそれが，産業の運営の中で，資本に帰せらるべきサーヴィスと，その力量能力によって資本を充用するサーヴィスとを区別することを妨げているのである。その結果，後に見るように，稼得の源泉の積み重ねを考察しながら，これを表現するのに曖昧さが生じてしまうのである。イタリア語はこの点では我がフランス語よりもっと豊かであり，われわれのentrepreneur d'industrieという語を指すのに四つの語を持っている。imprenditore, impressario, intrapenditore, intraprensore」[27]。

この議論を手掛かりに，経済学的に多少立ち入ることが出来る。英語とフランス語の比較がそのために必要にもなる。セイの註記は，18世紀と19世紀の境目くらいの時点で，社会の実態としては企業者的性格や企業者勢力が充分強まっていたイギリスで，言語上語彙を欠いていたために経済学的表現が不十分に終わり，逆に，社会的実態としての企業者はさほどの存在でないのに，言語上企業者を現す語彙を早くから持っていたフランスで,「企業者」が早目に経済学に登場した，という捻じれを指摘していたことになるが，この捻じれ自体，考察に価するものだからである。

3ーa. 英語の“企業者”

スミスにそもそも「資本家」がなかったのだから，これと「企業者」の区別がなかったことはセイの指摘を待つまでもない。そういえばリカード『経済学および課税の原理』にもそうした区別はない。彼のばあい資本家は単なる資本の人格的表現にすぎないのであって，特に主体的行動の余地を明示する必要はないのである。こうして，イギリス古典学派には「企業者」はおろか「資本家」も明示的には登場しなかった。それが古典派の後継者を幾分か困惑させる源になった。

J. S. ミルは,「利子と総利潤との間の差額は，企業者の努力および危険にたいする報酬となる」[28] と述べた後，この「企業者」に註して言う。「遺憾ながらこのundertakerという言葉は，この意味においてはイギリス人の耳に親しい言葉とはなっていない。フランスの経済学者達が日常les profits de l'entrepreneurという言葉を使いうるということは，彼らにとって大きな特典となっている」[29] と。

ミルは, undertakerは比較言語学的にはentrepreneurに相当するにしても，口用語では語義が食い違っているので，英語の経済学は「企業者」を表現する上でフランス語の経済学に及ばない，と言うのである。

アルフレッド・マーシャルも，同じことを別の表現でこう言っている。彼は一旦「企業者の出現」と書いたのち，これに註記して言う。「この用語［undertaker］はアダム・スミスが使用したもので，ヨーロッパ大陸でひろく行なわれているものであるが，組織された産業の仕事の分担として危険を負担し企業の経営を引き受ける人々をあらわすのに最上のように思われる」[30]。

マーシャルは上品な肯定形の表現をしているが，言いたい趣旨はミル同様,「企業者」を表現する語彙は大陸語に適切なものがあるのに英語では良い語彙がなく，スミスが使ったundertakerをもってこれに替えるくらいしかない，と言うことである。おそらく，英文にまだentrepreneurが定着していないころの文章である。

ところが『国富論』には，undertakerの文字が第二編第一章「資本の分類」中に一度だけ出てくる[31] ものの，葬式用具を貸し出す業者の意味なので明白に葬儀屋のことである。念のために原文を引いておけば，“Undertakers let the furniture of funerals by the day and by the week” だから，紛れようもない。他に用例はなく，同書で「企業者」の意味で使った例は見当たらない。マーシャルの誤読か，あるいは同編第三章で企業の意味のundertakingがこれまた一度だけ出てくる[32] のでそれと混同したか？

だが，この際もっと重要なのは，entreprendreは語原的にも語義的にもundertakeと置き換え得ても，その名詞形であるentrepriseがenterpriseとなってundertakingと共存し，担当者を現すentrepreneurはなおさら，そのままundertakerにはならなかったことである。undertakerは何よりも葬儀屋のことである[33]。17世紀末からこの用例が現れた。英語の場合のundertakerは動詞のundertakeと離れて独特の意味を含む語になったらしい。

因に，ドイツ語の場合，手元の辞書[34]にはunternehmenはフランス語のentreprendreの訳語と明記してあるが，意味はundertakeと同じく企てる，引き受ける，である。そしてunternehmerは，既にシュムペーターを扱った箇所で見たように，企業者であって葬儀屋の意味はなさそうである。オランダ語の場合も同様で，ondernemenが企てる，ondernemerが企業者である[35]。

英語の場合だけなぜundertakerが葬儀屋の意味になったのかは判らない。文学的には，よろず引き受け屋の意味のundertakerがその中で最も忌まれる葬儀屋の婉曲語となったと解し得るらしいが[36]，どうやら，近代英語ではundertakerは会話語では葬儀屋の意味になるのが原則である[37]。フランス語にはentrepreneur de pompes funebreで葬儀屋となる熟語があるから，フランス語の影響をひときわ受けやすかった後進模倣語の英語に，この葬儀屋の意味が先に入って定着してしまったのかも知れない。

英語でundertakerを企業者の意味に使った例はあるが特殊な事例と言ってよかろう[38]。動詞形でundertakeをentreprendreと同じ意味に使っても，動名詞化したundertakingは企業の意味ではむしろ別の語になりがちである。17世紀にはprojectが企業の意味だったと言う[39]。今ではフランス語単語entrepriseの英語化であるenterpriseがむしろ普通であろう。しかも企業者の意味ではenterpriserともなるが，学術的にはもっと直輸入のentrepreneurとなる。こうしたフランス語の英語化度が何ゆえ如何に違うかを詳しく解明出来ると面白いが，そこまでの知識は持ち合わせない。博雅の教えを乞う。

3—b. 怪しげな比較言語学

英語には，フランス語のentreprendreの名詞形であるentrepriseがわずかに英語化しつつ入って企業を意味する語となり，経済学用語の企業者としてはentrepreneurがそのまま使われることになった。フランス語をさらに遡る能力はないし，その必要も大してない。ただ，セイがイタリア語語原説を暗示していた。明示した訳ではないが，イタリア語に「企業者」を示す語彙が豊かだと示唆したのであった。そこからさらに何かを得られるだろうか？

イタリア語が語原だと仮定すると，理由として二つの事情が考えられる。一つはラテン語からの継承で，すでに資本家（commendator）と企業者（tractator）との間で投機事業を行なうcommenda契約形態があったとされる[40]から，これに由来するかも知れない。ラテン語からの継承はイタリア語が一番強かろうからである。

もう一つ，イタリアは中世貿易の拠点だから，ここに企業概念が早くから発達していたのかも知れない。無論この由来を確かなこととして主張するのではないが，現代イタリア語にimpressa

（企て・冒険，事業，手柄），これと同義のintrapresaという単語がある[41]。むしろ，動詞のintraprendereを挙げた方が良いかも知れない。セイが挙げた企業者を意味する諸単語は，いずれにせよこれらからの派生語であろう。ここから，言語的にも地理的にも近いフランスでentreprendre, entrepreneur, entreprise, といった語が出来たと考えることはそう難しくはない。この道の権威を挙証することが全く出来ないままだが，こうした筋は当たらずといえども遠からず，となりはすまいか。

4. カンティヨンの突出

カンティヨンについては,『資本論』にその名が挙げられていることで覚えていたくらいで，ほとんど何も知らなかった。マルクスは結構長い註[42]で，カンティヨンについて相当的確な考証をして見せており，つまりはかなり高く評価しているのだが，それに想到したこともなかった。改めて重視するようになったのは，またまた田淵太一氏のおかげである。

拙稿『ヘンリー・マーチンの経済学』[43]を書くに際して，田淵氏が大変有益な示唆を授けてくれていた。それが機縁となって，今回チャンドラーの揚げ足取りができることに気づいた時,「資本家」についてはスミスは語原ではないが,「企業者」はセイ語原説でよさそうだ，と電話で話したことがある。その後しばらくして，田淵氏から，ブローグの訳書[44]のセイの部分とカンティヨンの部分のコピーが送られて来た。セイより先があるとさりげなく知らせる，心憎い仕業であった。

そこであわてて図書館でカンティヨンを探って見た。一番有用な文献は，結局津田内匠訳『商業試論』[45]であった。原文の緻密な考証を踏まえた訳業であり，優れた解説もついている。こうした名訳が，アダム・スミスの会の訳業の最新刊として10年前に出現したことも知らずにいたなどは汗顔の至りだが，ともかくこれを繙いて見た。

「企業者」は第一部第四章に登場して以後頻出し，全書中で100回くらい現れる。これはこの『商業試論』の鍵鑰用語なのである。この「企業者」の概念は，第一三章「ヨーロッパでは企業者たちが自ら危険を冒して，物産と商品の流通と交換と生産を行う」で纏めて示される。社会の住民は，君主と地主の自立者以外は全て従属者であるが，後者は企業者と給与所得者の二階級に分かれる。給与所得者は定額所得者だが，企業者は，資本をもって自立していようと，資本を持たず自分の労働によるだけであろうと，不確かな生計の人々と呼ばれてよい。大商人も製造業者も借地農も，パン屋・肉屋・靴屋・仕立て屋も，弁護士・代訴人も渡り職人も，煙突掃除夫も水売りも果ては乞食盗賊も，この企業者階級に含まれる，と。資本所有の有無に関わらず，企業者を危険負担者と括れると言うのである[46]。

これはこれで明快な議論である。「資本家」が出てこないにも拘わらず，セイの「企業者」の場合と類似の形式的明快さがある。しかも，カンティヨンの企業者は，相互に需要者となり供給者となることを，つまりは経済社会の主体となることを展望した概念だと言っても良いのである。

出版が1755年，実際の執筆が1732年ころだろうと言われているから，セイに先行すること70年，ちょうどヘンリー・マーチンがアダム・スミスに先行したのと同様である。そう言えば，マーチンもカンティヨンも，ペティを継承すると明言し，かつ，マーチンはスミスにカンティヨンはセイに無視されたことも酷似している。

マーチン同様カンティヨンも長く忘れられた存在だった。マルクスが『資本論』でどちらも取りあげ，そうとう的確な紹介をしていたが，それぞれについての考証不完全もあり，かついずれも世に知られなかった。カンティヨンについては19世紀末にジェヴォンズが発掘したので再評価されるようになったと言うが，ジェヴォンズはカンティヨンを過大評価していたらしく，のちにシュムペーターがこれを糾そうとしている[47]。マーチンの方は，匿名冊子『東インド貿易の諸考察』＝『イギリスにとっての東インド貿易の諸利益』の筆者が彼であることが疑いなくなったのが1983年と，もう一世紀後になっている[48]。そのため再評価は今になって進行し始めたのである。

むすび

経済学説史の中にも，優れた説の埋没や忘却が結構起こっており，ずいぶん後になってから発掘されることが時々あるようである。もっと細かい用語史のばあいに，忘却や錯覚の持続が起こることも，ある程度までは致し方ないのかも知れない。それでもそれが少ないに越したことはない。ところが近年，忘却や錯覚に基づく誤謬が，かえって増えている気配がある。チャンドラーの粗忽や経営史家のシュムペーター読み落しもその例だが，このところ目立つ代表例が「神の見えざる手」である。スミスは「見えざる手」に「神の」を付けたことはないし，そう読み込ませるような書き方をしたわけでもない。そして，かつての研究者は「神の」を付けずに正確に「見えざる手」と書いていた。ところが近年，一般の物書きが，ヌケヌケと「神の見えざる手」と書くようになった。そればかりか，職業経済学者までが，スミス説を論じながら，改めて原文を調べもせずに「神の見えざる手」と，恥ずかしげもなく書くようになっている[49]。こんなことでは，友人ヒュームが無神論者として教授職に就けなかったことを知りながら「神の」を抜き，しかもそれで何とか通用させたスミスの緊張感と巧妙なレトリックを感得する手掛かりなどは掴めない[50]。これが学問の堕落である。それに匹敵するほどではないにしても，類似の感性弛緩が“資本家”や“企業者”の理解にも見られる。それによる堕落を減らすために，敢えて一筆してみたのである。

註

1）馬場宏二「“経済成長”の初出」『経済論集』81号，2003年３月

2）馬場宏二「経済政策論と現代資本主義論」『社会科学研究』41巻２号，1989年２月，73～75ページ，馬場宏二「金融資本論の企業論」『経営論集』第４号，2002年８月

3）Alfred Chandler Jr., *Strategy and Structure,* 1962, MIT Press, 三菱経済研究所訳『経営戦略と組織』1967

年 実業之日本社

4）同上訳書312ページ（*op. cit.*, p.314）

5）A. Chandler Jr., *The Visible Hand*, : *The Managerial Revolution in American Business*, 1977, Cambridge, Mass., and London : 邦訳 チャンドラー，鳥羽欣一郎・小林袈裟治訳『経営者の時代』上下，1979年 東洋経済新報社

6）「見えざる手」については，なお，馬場宏二「覚書「見えざる手」」大東文化大学経済研究所『研究報告』第13号，2000年3月を参照せよ。

7）Edwinn Cannan ed., Adam Smith *the Wealth of Nations*, 2vols, University Paperbacks 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫

8）上掲『諸国民の富』第一編第八章

9）『国富論』第二編第四章には，貸し手Lenderとか資本所有者Owner of capitalとかの語が辛うじて出て来るが，capitalistと単語化されてはいない。借り手borrowerは「まじめな借り手」とそうでない借り手に大別され，後者が浪費家prodigalsと企画家projectorsからなる，とされている。17世紀には企業をprojectと称したことがあったはずだが，ここではprojectorsはいわば山師である。『国富論』第二編第三章では，企業を一度だけundertakingと呼んでいるが，projectはない。同第一章にundertakerの文字はあるが，これは明らかに葬儀屋の意味である。

10）重田澄夫『資本主義の発見』1983年 御茶の水書房，『資本主義とはなにか』1998年 青木書店，『資本主義を見つけたのは誰か』2002年 桜井書店

11）上掲『資本主義を見つけたのは誰か』18～19ページ

12）Jean-Baptiste Say, *Traité D'economie Politique* Tome I. II., Paris 1803, Faksimile-Ausgabe 1986 Frankfurt/Main und Dusseldorf

13）Joseph Alois Schumpeter, *Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung*, Leipzig Verlag von Dunker & Humbolt. 1912, Zweite, neubearbeitete Auflage 1926

14）神戸大学経営研究室編『経営学大辞典』第二版，1999年 中央経済社，（若林正史筆）

15）シュムペーター，東畑精一・中山伊知郎・塩野谷祐一訳『経済発展の理論』，岩波文庫 上 175ページ

16）塩野谷祐一『シュンペーター的思考』1995年 東洋経済新報社，根井雅弘『シュンペーター』2001年 講談社

17）前掲邦訳『経済発展の理論』岩波文庫

18）同訳書，上巻202ページ

19）Schumpeter, *Theorie* 1912, S. 175, 1976Ausgabe S. 113

20）J. A. Schumpeter, *Epochen der Dogmen und Methodengeschichite*, 1914,中山伊知郎・東畑精一訳『経済学史』1950年 岩波書店

21）Chandler, *Strategy and Structure*, p. 286

22）シャルル・ジイド，シャルル・リスト，宮川貞一郎訳『経済学説史』上下，東京堂，1936～38年

23）マーク・ブローグ，中矢俊博訳『ケインズ以前の100大経済学者』1986年 同文舘，231～233ページ

24）J. B. Say, *Traité D'economie Politique*, 1803

25）*op. cit.*, Tome I, pp. 33-34

26）*op. cit.*, Tome II, p.221

27）*op. cit.* 6e ed., p. 79

28）J.S.ミル，末永茂喜訳『経済学原理』岩波文庫版（二），392ページ

29）同上393ページ。この後段は，原文の方が分かり易いので，引用しておく。It is regretted that the

word (undertakerのこと), in this sense, is not familier to an English ear, French political economists enjoy a great advantage in being able to speak currently of *les profits d'entrepreneur*.

30) マーシャル，馬場敬之助訳『経済学原理』東洋経済新報社 I，146ページ。原文に照らすと訳文は「この用語はアダム・スミスが用いたもので，大陸では日常的に使われているものだが」となるべきである。

31) Cannan ed., *op. cit.*, vol. 1, p.297, 大内・松川訳『諸国民の富』岩波文庫（二）240ページ　水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』（二）24ページ

32) *op. cit.*, p.363　上掲『諸国民の富』359,『国富論』129ページ

33) CODは，まずIn verbal sensesとして葬儀屋を挙げ，ついで歴史語として17世紀に王のために特定の法の成立を請け合った議員団を挙げる。英和大辞典は，この二つの意味では第一音節に，引受人・企業者の意味では第三音節にアクセントがあるとしている。日本人には，undertakerがまず葬儀屋の意味になることが直ちには理解し難い。

34) 岩波『独和辞典』による。

35) 講談社『オランダ語辞典』

36) 旧友のシェクスピア学者平田満男の示唆による。

37) やや面倒なのは，CODにはまず葬儀屋の意味だと解るように書いてあるのに，OEDには多くの語義・用法が併記されているだけで，日常の語義が解る書き方がないことである。

38) カンティヨン『商業試論』の仏英対訳版では，entrepreneurが悉くundertakerになっている。cf. *ESSAI sur la nature du COMMERCE en general*. tradui de l'anglois. a LONDRES, chez Fletcher Gyles, 1755

39) 参照，J. Thirsk, *Economic Policy and Projects*, 1978, サースク著　三好洋子訳『消費社会の誕生』1984年　東京大学出版会，第一章

40) 大隅健一郎『新版株式会社法変遷史論』1987年　有斐閣，5ページ

41)『伊和中辞典』による

42)『資本論』第一巻第十九章「出来高賃金」の註54。マルクスはここで，『商業試論』のフランス語版は，自称ではフィリップ・カンティヨンの英文の『産業・商業・鋳貨・地金・銀行・外国為替の分析』の仏訳だが，英文出版は1759年で内容的にも改作されたところがあると，かなり深く真実に迫っているが，例によって一般の経済学界から黙殺されたらしく，リシャール・カンティヨン『商業試論』は，ジェヴォンズによる1881年の発掘までは，あまり問題にされなかったようである。

43) 馬場宏二『ヘンリー・マーチンの経済学』大東文化大学経済研究所，Working Paper No.23, 2003年3月

44) ブローグ前掲訳書

45) アダム・スミスの会監修　R.カンティロン　津田内匠訳『商業試論』1992年　名古屋大学出版会

46) 同上書35～38ページ

47) シュムペーター，東畑精一訳『経済分析の歴史2』1956年　岩波書店，455ページ

48) クリスチーン・マクラウドによる。参照，前掲馬場『ヘンリー・マーチンの経済学』11ページ

49) この点はすでに，馬場前掲「覚書「見えざる手」」で警告してあるが，その後も改まらないばかりか，若手研究者の間にますます増えている。憂うべき現象である。

50) 晩年スミスは，ヒュームの死を悼んだ手紙によって無神論者と非難された。『資本論』第一巻第二三章第一節，註75を見よ。

2002年2月2日～4月26日

追記：校正過程で山口重克氏の御教示があり，ヘバート・リンク『企業者論の系譜』を参照したが，語源論，語義史としては本稿に加えるべきものはなかった。